西淀病院と医療人をつなぐコミュニケーション誌

みどりコミュ！

Vol.2

2016.6

特集

2. 西淀病院の初期研修

4. 家庭医に聞く！

CONTENTS

6. キラリ★西淀人　8. ATBって何？　9. JOYS（女医ズ！）

10. I LOVE Patient　11. シリーズ職場REPORT

特集

西淀病院の初期研修

西淀病院は定数２の初期研修指定病院ですが、この５年間で10人の初期研修医を受け入れています。2014年度には、卒後臨床研修評価機構（JCEP）を受審して、「研修医の満足度が高い」との講評を得て、３年間の認定を受けました。2015年度、初期研修を西淀病院で受けられた先生方からお話を聞きました。

Q1 西淀病院で初期研修を行おうと思ったきっかけを教えてください。

Q2 １年目研修でよかったことや、改善した方がよいのではないかと思ったことを聞かせてください。

Q3 来年、初期研修を行う後輩の研修医へのアドバイスを教えてください。

吉澤　賢志　医師

1

西淀病院で病院見学・実習させてもらった時に、落合先生や先輩の研修医の先生と話す機会がありました。その時に、研修医の先生が楽しそうに働いておられて、落合先生が非常に熱心に話してくれました。実習させて頂いた時も、他の先生も熱心に教えてくださいました。ここに来たら自分が成長できるかなと思い、西淀病院を選びました。

2

耳原総合病院と西淀病院は同じようなプログラムですが、西淀病院の方がペースがゆっくりしていて、丁寧に教えてもらえるという印象があります。医局や周囲のサポートが充実しているので、安心して研修のスタートが切れました。

耳原総合病院で同期の研修医と一緒にレクチャーを受けることがありますが、日程やペースが違っていたので、もう少し調整して頂いても良かったかなと思います。

3

他職種の同期と一緒に研修することもあり顔見知りになります。必要な情報を交流できたり、時には同期でしか話せないようなことを話せたりするので、職種を越えて同期を大切にしたら良いと思います。

指導医の先生以外にも、医局の先生方や他の職種の方々も、親切に教えてくれるので、自分から積極的に聞きにいったら良いと思います。

また、手技など技術面のことは、機会があれば、どんどん経験させてもらった方が良いと思います。西淀病院よりも耳原総合病院でしか経験できない手技もありますが、逆に、西淀病院の方が症例の多い手技や患者さんもいますので、機会がある時には経験させてもらった方が良いと思います。

谷田　遥香　医師

1

決定打は落合先生との面談でした。わざわざ医学生の私のために多忙な時間をさいて面談にきてくれました。何を話したか今はあんまり覚えていませんが、どんなことを大学でしてきたのか、どんな医者になりたいのか、何に興味を持っているのか、などを医学生相手にとても真剣に話をされ、聞いてくれました。また、落合先生のワールドカップの話も印象的でした。仕事もプライベートも楽しんでおられるところ、またその親しみやすい人柄や医学を語る真剣さに惹かれ、この先生が指導医をしてくださる病院で働きたいと思いました。

2

一番良かったのは西淀病院の雰囲気です。他職種の方々も研修医のことを気にかけてくださり、みんなで研修医を育てていこうとしてくださいました。また、研修中はしんどいことや悩むことも有りましたが、常に誰かが気づいてそれを発信してくださいましたし、また自分から発信できる場所も用意してくださいました。初期研修１年目のスタートは医師への一歩でもあると同時に社会人への一歩となり、実に様々な変化にさらされることになります。毎日できないことの連続で落ち込んでいきますが、この西淀病院だからこそ無事に初期１年目を終えられたと思っています。

改善して欲しいところは病棟業務と往診や救急外来研修との時間の割り振りです。基本的に病棟業務が中心になってきますが、救急外来や、途中から２週に１回の往診が入り１日の中で病棟に当てられる時間が２時間しかない、という日もありました。病棟の時間をもう少しもてるようにしてもらえれば嬉しいです。

3

西淀病院はとても気軽に研修医の相談に乗ってくれる病院です。悩むことも多いと思いますが、気軽に相談して、愚痴をこぼしてください。そして２年間の研修を無事に終了してください。きっと２年後、西淀病院で研修を初めてよかったと思えるようになっていると思います。

指導医から

西淀病院で初期研修を受け入れるうえで心がけていることを教えてください。

初期研修はとても大切な時期です。臨床の力をつけるという研修を妥協なくやって頂きたいと思います。

西淀病院での初期研修は、指導医だけでなく看護師、薬剤師、臨床検査技師、セラピスト、MSWなど多職種から教えてもらえる環境があります。

耳原総合病院とのローテート研修を行っていますので、耳原では救急蘇生など救急処置の技術や知識を身につける機会があります。西淀病院でも年間2,000件を越える救急車の搬入を受け入れていますので、耳原にはない症例を見る機会も多くあります。

知識、技術に加え、チーム医療の中心として仕事をしていく上で必要なコミュニケーションやマネージメントの力、患者さんとの信頼を築く技術や人間性を養っていくことをなにより大切にしています。

西淀病院では、病気を治す為に、患者さんの生活背景や家庭状況、経済的な問題とか、他職種と共同して探り、様々な働きかけを行っていきます。

また初期研修時代は、社会人１年目でもあり、医師としての一歩を踏み出す時でもあり、いろいろなストレスがかかります。特別扱いするのではありませんが、丁寧にフォローして、なによりも無事に２年間の研修を終了して、後期研修につなげていく。これが私たちの役割だと思っています。病院にとっても、自分たちのやっている医療を見直す貴重な機会になります。

落合 甲太 医師

これから初期研修を迎える医学生に伝えたいことを教えてください。

初期研修は、ベッド数やその他のハード面だけでなく、ソフト面もとても大切な要素だと思います。

いろいろな研修プログラムがあると思いますが、技術、知識、医師としての態度、の３つを意識して、自分に一番適した研修先を探して頂きたいと思います。

地域を支える中小の病院の役割も伝えていきたいと思っていますので、一度、見学に来てほしいと思っています。

特集

家庭医に聞く！

「地域に求められる主治医力」を実践中の西淀病院大島院長とファミリークリニックあいの花房所長に家庭医としてみた現状を聞きました。

西淀病院

院長 大島　民旗

普段の仕事の様子

2013年から病院長として管理的な役割を担っています。臨床面では、回復期リハビリテーション病棟（56床）の医長ですが専従の医師が別にいるので担当している患者さんは10名以内です。主にステロイド薬、抗リウマチ薬などを服用している人、精神科の薬を数多く服用している人、心不全と腎不全を合併していて薬剤の調整が難しい人などを受け持っています。透析室（25床）の室長も兼務しています。また病院の外来を2013年から「総合外来」として、家庭医・地域総合内科医がなるべく外来に入り、症状のはっきりしない患者さん、何科に受診してよいかわからない患者さんも気軽にかかれるようにしましたが、その分野の医長も兼ねています。

１週間の過ごし方としては、外来が週５単位、その他の時間で病棟業務や透析患者さんの回診、管理者との打ち合わせなどが大まかな過ごし方です。

家庭医の立場から

日本のような100～200床の中小規模病院は、欧米にはあまりないそうです。世界的には診療所は家庭医、プライマリ・ケア医が、病院は専門医が担うものといった役割分担がされていますが、日本のような地域の中小規模病院でどのような医師が働くことが地域の住民にとって恩恵が大きいかは定まっていません。私自身はこの間の実践の中で、こういった病院での家庭医の存在はかなり有用だと思っています。特に高齢者の占める割合が増えてくる中では、従来の入院＝治療、という枠組みが成立せず、逆に入院することでかえって病状を悪化させたり認知症の症状が顕著になったりといった、「副作用」も一定の割合で発生します。誤嚥性肺炎の患者さんが入院→一旦絶食、持続点滴、心不全の患者さんが入院→尿道カテーテル、持続点滴、といった発想から、地域で生活するその患者さんと周囲の環境を素早く把握し、最適の「落としどころ」を見定めるうえでも家庭医の持つ臨床能力は有効です。

今後の展開

大阪家庭医療センターのプログラムでは、総合診療専門医の専門研修期間18カ月を、6カ月は西淀病院、6カ月は大阪府下に4か所ある家庭医療専門医のいる診療所、6カ月は中規模病院である耳原総合病院（386床）で研修することを「推奨プラン」としたいと思います。家庭医療学を家庭医療専門医のいる診療所で研修できることは大きなアピールポイントです。また救急研修については耳原総合病院か西淀病院かの選択をしていただけるようにしたいと思います。西淀病院は「内科二次救急告示」ですが実際は「なんでも救急」でして、初期研修で洗練された救急研修を堪能した方には向いていると思います（笑）。病院は家庭医とサブスペシャルを持ちつつ総合性を重視する内科医が、現在の外科整形外科、小児科、婦人科医師と協力しながら、病院内から地域に日常的に出て活躍できれば、地域の健康度を上げることに貢献できるのではと期待しています。

ファミリークリニックあい

所長 花房　徹郎

普段の仕事の様子

私は現在、「ファミリークリニックあい」という法人の関連診療所で所長として働いています。「ファミリークリニックあい」は、2014年12月に淀川区に新しく開業した家庭医クリニックです。実際の診療現場では、0歳の初めての予防接種からはじまり、一緒に来られたお父さん、お母さんの風邪の診療や健康の相談、100歳に近い方の訪問診療から自宅でのお看取りまで、老若男女を問わず、様々な方の診療にあたっています。また、健診や予防接種の推奨や、毎月１回は市民向けに健康講座を開くなど予防活動にも力を入れています。開業して、約1年しか経っておらず、まだまだ患者数としては多くはありません。しかし、私自身が家庭医療専門医であり、地域医療のスペシャリストとして、「地域に根ざした、あなたやあなたの家族のかかりつけ医」をモットーに赤ちゃんからお年寄りまで誰もが気軽にかかる事が出来る診療所を目指して、地道に医療活動を続けています。

家庭医の立場から

診療所がある地域は、新大阪の近郊でもあり、周囲にも医療機関がたくさんあります。そんな中で私たちが果たすべき役割は何なのか考えながら診療してきました。1年近く診療している中で、様々なケースを経験してきました。複数の医療機関にかかっているが服薬の管理ができていない方。認知症の介護や老々介護の問題。区画整理が進む中で、転居せざるを得なくなり、新しい土地でコミュニティがなく孤独を感じている高齢独居の方。複数の医療機関を渡り歩く患者が心理社会背景を抱えて受診するケースの多さ。在宅医療のニーズも高いと感じています。これらのことは、淀川区のみならず、都心部の特徴なのかもしれませんが、このようなケースにいかに介入していけるかが、われらに課されている役割なのではないかと思います。一方でこのことは、我々診療所や法人だけで成し遂げられることでもないのだと思います。淀川区という地域の中で、いかに周囲の医療機関や介護事業所などと連携して歯車の一つになることができるかが大切なのだと思います。

今後の展開

ファミリークリニックあいは、まだ開業したてであり、今は基本的には私が診療にあたることが多いのですが、将来的には複数の家庭医が出入りするような診療所を目指しています。「私がいないとだめ」な診療所ではだめだと思います。診療所は個人のものでも、法人のものでもなく、地域のものですので、これから50年100年と地域の中でなくてはならないものとしてあり続けてほしいと思っています。そのためにも、継続的に質を保って医療活動ができる素地を作っておく必要があり、後継者作りは必須の課題だと思います。家庭医療専門医は、専門医の中ではまだまだ数も少なく、マイナーな部類ですが、今の医療情勢において、地域の中で果たす役割は大きいと感じています。ファミリークリニックあいでも、将来的には教育診療所の位置づけとして、研修医や専攻医の受け入れを行い、たくさんの地域で活躍できる医療者を輩出していきたいと野望を抱いています。

キラリ西淀人 vol.02

穐久（あきひさ） 英明

西淀病院　副院長

第２回に登場は穐久英明西淀病院副院長。
長らく被爆医療・訴訟に関わってこられた思いなどをお尋ねしました。

被爆者医療とかかわるきっかけをお聞かせください

京都大学の理学部から大阪大学の医学部へ学士入学しました。その時に、被爆者運動のリーダー的な存在だった高木昌彦先生（大阪大学医学部講師）（奥さんは、被爆者として有名な高木静子さん）を知り、その強い影響を受けて反核平和・被爆問題を考えるようになりました。

西淀病院で働くようになってからは、1987年にフランスが南太平洋で核実験を実施したことに抗議する意味もかねてニュージランドで行われたIPPNWアジア・太平洋地域集会に参加しました。

西淀病院で働き、西淀川公害裁判に関わったものの、被爆者問題では2000年７月、最高裁で勝訴した松谷裁判には関心をもっていましたが、裁判支援には関わってはいませんでした。

原爆症訴訟１次原告の方（被爆者）、弁護団、医師団、支援者が力をあわせる中で、2006年５月12日の大阪地裁での判決で、原告９人全員の被爆者認定が認められました。

原爆症裁判に関わっていた郷地先生（兵庫民医連東神戸診療所所長）が、2007年３月の「ドクター・ウェーブ」近畿集会で私を眞鍋医師（３人は、ニュージーランドに一緒に行った仲間）と間違えて「今度、弁護団と医師団の会合があるのを聞いている」と声をかけてきました。人違いであったことは、後で知りました。２次訴訟が始まるところでした。これ以降、私は、原爆症裁判に関わっていきました。勘違いがきっかけです。また、2008年４月から、自ら長崎大学医学部で被爆して被爆者医療に携わってきた小林栄一医師の支援で、此花診療所で外来をするようになり、色々と教えていただきました。

被爆者認定訴訟での意見書、法廷での証言での医学的なアプローチをどう行いましたか？

被爆直後の急性障害については、医学的に証明されていますが、被爆から年月が経ってからの障害についてはデータも不十分で、よくわかっていないことも多くあります。

ニューヨーク・マンハッタンのNPT（核不拡散防止協定）アピールパレード

被爆された方に多くみられる癌でも心筋梗塞でも、誰でもかかる病気です。それが被爆によってどの程度悪くなったのかを明らかにすることが大事なのですが、医学的に証明することは、なかなか困難な課題です。しかし、証明できないからといって、原爆との関係を否定することはできません。遠距離被爆、爆心後に広島、長崎に入られた方への影響など含めて、聞き取りや様々な文献に目を通して裁判所に提出する意見書を書かなければなりませんでした。

専門的にやってきたわけでないので、新たな勉強が必要でした。郷地先生からは、文献含めて、ずいぶん指導を受けました。

裁判は、まだ続いています。被爆者の方が救済されていないからです。2011年の福島原発以降、避難者の訴訟が起こされ、国は反撃に出てきています。

被爆者の方だけでなく、弁護士さんに頼まれ、原発労働者の労災の医師意見書も書きました。核兵器だけでなく、放射線の被害者はたくさんいるのです。福島を忘れません。

2015年、国連（ニューヨーク）で開かれたNPT（核不拡散防止）再検討会議で、国連のアンゲラ・ケイン上級代表と

先生の今後の抱負は？

昨年、ニューヨークの国連本部で行われた核不拡散防止再検討会議に行ってきました。マンハッタンでのパレードや署名行動、国連の正式な会議の傍聴など参加してきましたが、人類がつくりだしたもっとも非人間的な大量破壊兵器である核兵器廃絶に向けたとりくみに、今後も関わっていきたいと思っています。

国が被爆認定を認めず、置き去りにされている被爆者の方々、あるいは被爆二世、三世問題とも向き合っていきたいです。

西淀病院で、福島で被ばくされ、大阪や近畿に避難されている方々の避難者健診も行っています。福島などで被災された方々の健康問題、生活支援、さらに日本から原発ゼロをめざす取り組み。

医師として科学者としてアプローチしていかなければならない課題はたくさんあると思っています。
また、第二次世界大戦では、一部とは言え、日本の医師が中国で妊婦や幼い子どもたち含めて人体実験を行ったり、医師会が戦争政策に加担した痛苦の歴史があります。

ドイツではすべての医学生にナチスの行った人体実験を伝え、繰り返さない為の教育が行われています。１人の医師として、人間として、平和を大切にしていきたいと思っています。

ATBって何？

西淀病院（以下、病院）とのざと診療所（以下、診療所）では、ＡＫＢをもじって「Ａ（あかん）」、「Ｔ（たばこ）」、「Ｂ（撲滅）」の頭文字をとり、親しみを持てるようにＡＴＢにして、禁煙推進を行っています。禁煙対策委員会を引き継いだ野口先生に活動を聞きました。

当初は、禁煙外来、禁煙教室と病院と診療所内で行っていた取り組み中心でしたが、地域に出て行って喫煙を防止する、予防する取り組みを進めていっています。

2011年から、歌島小学校で喫煙防止教室として、小学校５・６年生を対象に、たばこを吸いはじめないようにしましょうねという啓蒙活動をはじめました。

その後、淀川区にある「ファミリークリニックなごみ」の近くの加島小学校、田川小学校でも、喫煙防止教室を行っています。

病院と診療所では、無料で禁煙教室を開催しています。禁煙教室を受けた方の約９割の方が禁煙外来を受診されています。病棟や外来の看護師さんから、患者さんへ禁煙教室に参加してもらうよう働きかけてもらうことがとても大切です。すべての禁煙外来は予約制としています。

禁煙外来は年間で50人前後ですが、ＡＴＢのメンバーで１年間フォローしています。そのフォローを通じて、成功した人や中断した人の傾向など分析しています。禁煙の成功率は60％前後です。健診受診者にも、禁煙教室の案内をしてもらえないか相談しているところです。

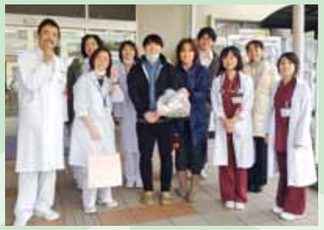
ＡＴＢの取り組みを教えてください

月１回第３木曜日の昼に30分間ほど集まっています。メンバーは医師、看護師（病院と診療所から）、薬剤師、臨床検査技師、ケースワーカーです。

会議では、禁煙教室、禁煙外来の状況、地域の取り組みの状況などを出し合い、今後の進め方について話し合っています。また、職員喫煙アンケートなどにも取り組み、すべての職員が患者さんに、禁煙をすすめられるようになるとともに、職員自身の喫煙に対する知識をつけてもらえるような取り組みなども行っています。

ＡＴＢのプチ自慢は

毎月22日、スワンスワンの日として、病院のまわりの歩道に落ちているたばこの吸殻を拾っています。また、医師だけが禁煙を呼びかけるのではなく、多職種がよびかける方が禁煙の成功率が高いとか、行動変容を促しやすいなどのエビデンスもしっかり出ていますので、いろいろな職種がかかわっていくことが大切です。実際に、検査技師はスパイロ検査の結果から喫煙の副作用を語ったり、ケースワーカーもアルコールとタバコの依存性の問題から働きかけたりできると思います。



ＡＴＢへの思いを聞かせてください

「たばこ」は百害あって一利なしです。まず子どもたちを「たばこ」の健康被害から守ること。そして、子どもたちのことを思う大人を巻き込んで、地域まるごと健康づくりを進めていきたいと思っています。

JOYS! 女医ズ★

日本一女性医師が働きやすい病院を目指して

女性医師に聞く！

2007年和歌山大学卒業　内科副医長
急性期病棟、糖尿病外来、救急外来
大学のカンファレンスなどの日々、
趣味は旅行

上田 真意子さん

Q　西淀病院とのかかわりについて

高校２年生の時に「お医者さん１日体験」でおじゃましたのが一番最初の西淀病院との出会いでした。やさしい女性の先生が対応してくれて、こんな先生になりたいと思ったことを覚えています。大学合格後も「MediWing」をずっと読んでいて、民医連のような患者さんに寄り添った病院に就職したいと思っていました。耳原総合病院で研修をスタートし縁あって就職しました。

Q　どんな医療活動を担っているか、どんな働き方をしているか

サブスペシャリティーとして糖尿病を専攻し、急性期病棟で働いています。受け持ち患者さんは半分は糖尿病コントロール入院、半分は様々な疾患です。糖尿病患者さんの中にも足壊疽や緊急透析の必要な重症患者さんであったり、逆に落ち着いているけどインスリンを打ってくれる人のいない独居の高齢者で退院までに様々な調整が必要であったりとバラエティー豊かです。週２回の糖尿病外来のほか救急外来、胃カメラ、大阪大学内分泌代謝科のカンファレンスへの参加などをしています。

Q　女性医師にとってどのような病院か

前回、野口愛医師のインタビューにあったように女性が働きやすい病院を目指して取り組まれています。子育て中の女性医師は３人いらっしゃいますが皆さん常勤医として頑張っておられます。私自身も少し治療中で当直はせず日直＋居残り業務にしていただくなど配慮していただいています。そのような環境なので女性医師が急性期病棟でも活躍できているのだと思います。もちろんギリギリの時もあります。そんな時は女医の中で「聞いてください!!」とぐちって発散すると元気になります。体調が悪いときに女医さんからも事務の方からも声をかけてもらえてすごく心が楽になります。女性医師だけでなく男性医師もそれぞれの多様な役割を認め合える雰囲気が西淀病院にはあると感じます。他職種もみんなが優しいので私はこの職場が大好きです。

I Love Patient
Vol.02

感性と力量で寄り添い切りたい

看護師　粟野文枝

人生の最期もその人らしく

看取りは、その人自身の人生をまるごと受け止めること

残された時間をどう過ごすか、患者さんもご家族もそれぞれの思いがあります。そこに心を寄せ最期を看取ることは経験を積んだ看護師でもとても難しいことです。

看護師経験39年。その間、中央材料室、病棟看護、小児やリハビリ病棟師長、診療所師長、ケアマネジャー、看護学生の相談や援助担当などを経験してきました。

看取りは、その人自身の人生をまるごと受け止めることです。看護技術とともに、個々の看護師の感性とチームとしての力量がひとつになってはじめて、患者さんに寄り添える看護が行えるのかもしれません。

４年ぶりの再会、ご家族の思いも受けとめながら

診療所時代の顔なじみの患者さんが入院してきました。４年ぶりの再会です。入院された病棟は違っていましたが、顔を見せに行くと「粟野さん」って抱きついてくれました。

地域では老人会で活躍したり、卓球したり、三味線を教えたりと、一目置かれる存在だったＡさん。しかし病棟では、昔の面影など感じられないほどやせ細っていました。

何度も精密検査を勧められていましたが、「これ以上の検査はいや」と拒否してきて、わかった時には、すい臓がんはすでに進行していました。

ご家族は告知を望んでいませんでしたが、本人は気づいていたんじゃないかと私は思っていました。

告知しないことを決めたご家族のストレスを受けとめるために、患者さんのいない部屋で長女さんや長男さんの話もよく聞きました。

ご家族の話を聞く中で、病棟で三味線の演奏会を開催するアイデアが出されました。本人とも話をすると「私はもう弾かれないけど三味線の音を聴きたい」との返事でした。三味線教室のお弟子さんたちに、病棟に足を運んでもらうようお願いしました。

病室での三味線の演奏会

粉雪が舞う２月のある日、Ａさんは朝から疼痛緩和の麻薬の影響でぼんやりした状態でした。Ａさんの個室に、長女さんやお孫さん、院長、看護師、セラピストたちも集まります。

近くのお部屋の人たちに「ちょっと三味線の音しますけど」っと断っていくと、「私も聴きたい」と、他の病室の患者さんたちも集まってきます。

ミニ演奏会がはじまると、それまで目をつぶっていたＡさんは、今まで見せていた様子と大きく変わり、お弟子さんたちの演奏姿をじっと見つめ、まるで自ら演奏しているように右手がベッドの渕でトントンとリズムをとっています。

予定していた曲が終わると、Ａさんは穏やかな顔で「今日の演奏は良かった」と言うと、お弟子さんたちが「初めてほめてもらった」と涙を流すと、つられて長女さんや看護師の目に涙が。院長もＡさんの手を握ります。

１週間後の３月３日、ひな祭りの日、天国で夫の待つひな壇へ旅立ちました。

病棟では、がん末期の患者さんの結婚記念日を祝う取り組みを行ったり、がんでなくなっていくお母さんに父と幼い娘が、一緒にクリスマスケースをつくったりもしています。

シリーズ職場REPORT

第2回　血液浄化室

“働きやすさが自慢の職場です”

スタッフ間の協力と患者様とのコミュニケーション

現在、血液浄化室には、看護師９名と臨床工学技士６名　計15名のスタッフがいます。西淀病院の２階で、60名以上の患者様の透析治療を行っています。

透析治療とは、腎不全のため尿から排出できずに体内に溜まった水分や毒素を人工腎臓で除去する治療で、週３回、１回につき４～５時間行う治療です。月・水・金は午前、午後の２クール、火・木・土は午前中の１クール行っています。

透析室では、看護師と臨床工学技士が協力しあい、透析治療を安全に快適に行えるように努めています。

ベテランスタッフも多く、患者様とコミュニケーションがしっかり取れ、スタッフ間の人間関係も良いことが自慢です。

毎月多くの検査項目があるため他職種とのコミュニケーションも大切にしています。

スムーズな透析治療のために

看護師、臨床工学技士の業務内容は、患者様のシャント(*)血管に２本の針（15Ｇ～17Ｇ）を穿刺することから始まります。穿刺がうまくいかないと透析治療がスムーズに行えないので、トラブルの多いシャントについては、臨床工学技士が超音波検査を行い、早期治療につなげられるようにしています。

透析治療の間、看護師は患者様のバイタルや状態の観察を行い、異常の早期発見に努めるとともに、痛みの除去などの援助をします。また、フットケアも行っています。

臨床工学技士は、透析業務のほかに、病棟で使用する医療機器のメンテナンスを行い、他職種向けの医療機器の学習会を定期的に行っています。

また、透析の専門知識向上のため透析技術認定士の資格も取得、外部研修・学会にも積極的に参加し知識向上に日々努めています。

生活の把握に自宅訪問も

透析を導入された患者様にとって、透析は生活の一部となります。自宅や生活の様子を把握するために、自宅訪問もさせて頂いています。透析室の看護師は、患者様が透析をスムーズに受け入れられるように援助すること、生活上の困っていることなどを聞かせていただき、一緒に解決できるように考えることを大切にしています。

＊血液透析を行う際、充分な血液量が確保できるように、動脈と静脈を体内または体外で直接つなぎ合わせた血管の事をいいます。

よどコミュ！
西淀病院広報誌「よどコミュ」
Vol.2　2016年6月1日発行

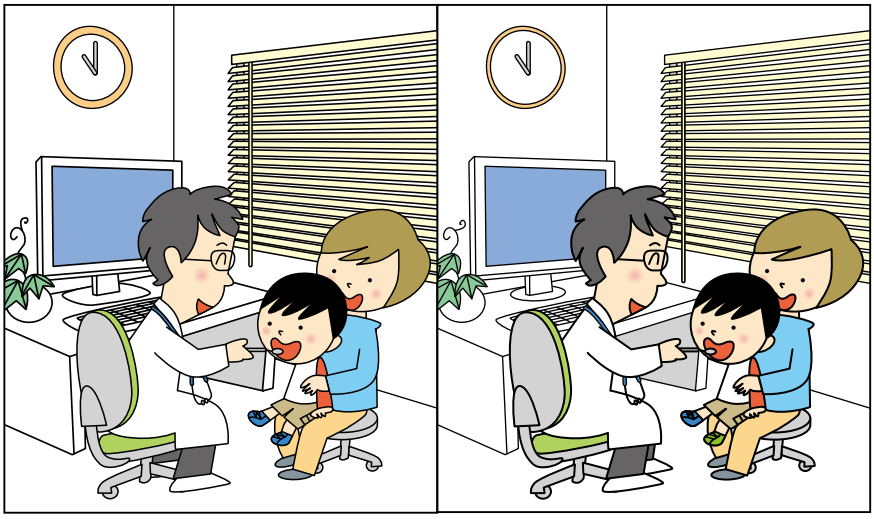
クイズ

7つのまちがいさがし

正解者の中から抽選で5名に図書カードを進呈します。
（但し医師・看護師及び医系学生の方に限ります）

締切日：9月末到着分

はがき又はE-mailで答えを送ってください。
・クイズの答え
・氏名・職種・職場名又は学校名
・住所・電話番号・E-mail
E-mail：yodocom@yodokyo.or.jp
郵送：〒555-0024 大阪市西淀川区野里3-5-22
西淀病院 クイズ係　宛



研修医・医師・看護師募集中！

病院見学・実習随時可能。お問い合わせください。

一般財団法人 淀川勤労者厚生協会 **西淀病院**
〒555-0024 大阪市西淀川区野里3-5-22
TEL：**06-6472-1141**（代表）
医師／看護師採用担当までご連絡ください。

編集後記

熊本大地震で被災された皆様が、1日でも早く震災前の生活に戻れることを心から願っております。

淀川勤労者厚生協会（西淀病院が加盟する法人）では、4月16日の本震発生の3日後から、落合医師や蓮間医師をはじめ薬剤師、看護師やセラピスト、事務などを現地に派遣し、医療支援を行ってきました。日本医師会や国境なき医師団、DMT、日赤、TMTや薬剤師会、看護協会、自治体関係者なども、多数駆けつけており、社会的連帯を感じました。

各医療機関では、南海トラフト大地震にそなえて、防災マニュアルの整備や訓練を行っていますが、阪神淡路大震災級の揺れ、東日本大震災級の津波などに対応することは、大きな困難があると予想されます。個別の医療機関の努力だけでなく、行政あげた支援策も必要だと思います。

しかし、熊本大地震が起こった直後の国会では、被災された方々が、避難所や車中で、十分な食事も口に出来ない状況で生活されている中、TPPの審議が進められていました。困難な時ほど、その本質が見えてきます。今の政治がどの方向に進もうとしているのか、しっかりと見極め、働きかけていくことが必要ではないでしょうか。

最後に、5月13日時点で、西淀病院へ職員や患者さんから、約50万円近い義援金が寄せられました。お寄せいただいたみなさんへ心より感謝いたします。

淀川勤労者厚生協会西淀病院

救急病院　基幹型臨床研修指定病院

大阪市西淀川区野里3-5-22　TEL：06-6472-1141

診療科目
内科（呼吸器、循環器、消化器、神経、糖尿病医）
外科・整形外科・婦人科・泌尿器科・放射線科・
小児科・リハビリテーション科・血液浄化室（人工透析）

総ベッド数：218床
一般病棟：110床
地域包括ケア病棟：54床
血液浄化室（人工透析）：25床

表紙：初期研修医　谷田 遥香さん　吉澤 賢志さん

西淀病院は医師もメディカルスタッフも皆一緒になって患者さんのことを考えていけるアットホームな病院です。ぜひ西淀病院にいらしてください！

一般財団法人 淀川勤労者厚生協会 西淀病院　〒555-0024 大阪市西淀川区野里3-5-22　TEL 06-6472-1141　URL http://nishiyodo.org/